



3000字小説

君島恒星

はじめまして ...目次

はじめまして

自分と違う世界を覗いてみたいと思ったことはありませんか？

ちょっと小さな創作の世界に入ってみるのもいいかもしれません。

小さなドラマが小さな刺激になりますように！

目次

「旬」

「ノイズ」

「エンドレス イブ」

その日のテーマは、熊の肉でした。部屋の中には立派な厨房が出来上がっています。肉を焼く分厚い鉄板も特注品らしい輝きを秘めていました。シェフを見てびっくりしました。まだ二十歳前後の女性のシェフだったのです。わたしは父に言いました。

「随分と若いシェフね」

父は笑って答えました。

「若いと不安かい？ この美食倶楽部は素材を大切にすると云っただろう。それに、あのシェフは有名な子なんだよ」何でも、学生料理コンテストのフランス料理部門のチャンピオンなのだそうです。目の前で料理をしてくれ、みんな美味しそうに頬張っています。

わたしも頂きました。

熊の肉を使っただけのフルコース。

その中でも、時間をかけてローストしたものが、とても美味しかったので父の分も少しもらってしまいました。倶楽部の人たちは、あまり食べません。美食家になると食が細くなるのでしょうか？ 一通り食べ終わると、わたしはひとり、タクシーで帰らされました。

「会員だけの二次会があるんだ。先に帰っていてくれ。幾らかかってもいいから、タクシーで帰るんだよ」

これから、また何か食べるのでしょうか？ わたしはお腹がいっぱいなので、言われたとおりに帰ることにしたのです。父が倶楽部に誘った時のためらいが何だったのか、結局わかりませんでした。その晩、父は帰ってきませんでした。その後も第一土曜日は、自由な時間をつくることができました。父がよく「男は十八歳過ぎてからつくれよ。それまでは、お父さんが許さないからな！」と、言っていました。父の目とその言葉に、わたしは彼をつくることもできませんでした。

そんな父が、突然の交通事故で亡くなってしまったのです。息を引き取る時に、父はわたしに言い残しました。

「おまえの十八歳の誕生日に、美食倶楽部から連絡がくる。父さんの代わりに、おまえがひとりで、行ってくれないか？」

行きたくもなかったのですが、父の死の報告を兼ねて、顔を出そうと思いました。次の第一土曜日は、わたしの十八歳の誕生日でもあったのです。誕生日を迎える三日前に、招待状がわたしの名前で届きました。会場となった伊豆の別荘には、九人の着飾った人たちが、迎えてくれました。

「まあ、十八歳になられたの？ 大きくなったわね。確か、中学生になったとき、お父さんと御一緒にいらしたわよね？」

「六歳の小学生になったときに、フランス料理店で会ったけど、おじさんのこと憶えているかな？」

「わたしなんて、二歳の頃を知っているよ。大きくなって・・・やっとな、倶楽部に来てくれた・・・お父さんは来れなくて、悔やんでいるだろう」

「そうね。一番悔やんでいるのはお父さんよね。十八年も育ててきたのに・・・」

みんな、わたしの子供の頃を知っているようなので、改めて緊張してしまいます。中学生の時にも会っているのですが、あまり覚えていませんでした。

「そう固くならないで。この倶楽部は、美食家の集まりなのです。旬のものを美味しくがモットーです。では、こちらに」

その部屋にいくと、猪の肉料理が並べてありました。

「今が旬なんですよ。どうぞみなさん」

みんな席につき、目を輝かせています。わたしも、箸を伸ばしました。これが、けっこう美味しいのです。生肉がこんなに美味しいなんて、新しい発見でした。

「とても美味しいです」

「たくさん食べてください」

みんなは笑顔で進めてくれました。

みんなの視線が、わたしに集まるような気がしてなりません。小学生の時のフランス料理店のようでした。そして照れ隠しに、水を飲んだとたんに、目がまわってきました。みんなの姿がぼやけては、左右にゆれました。そして気が遠くなり、倒れてしまったのです。遠い意識の中で、みんなの声が聞こえてきました。

「長い時間をかけて・・・お父さんか・・・お父さんか・・・お父さんか・・・」

「長い時間をかけて、いい娘さんを、お育ちになられたね」

「まだ処女だと、聞いている。男を知らない十八歳・・・今が旬だ！」

「いい肉体をしている」

「ああ、とっても美味しそうだ」

気の遠くなった耳に、包丁の磨ぐ音と、火を点火する音が響きました。

中学の時、倶楽部に誘うのをためらった父の気持ちが、ようやくわかりました。わたしは、このために育てられていたのです。

そういえば、中学生の時にいった八ヶ岳の若い 女性シェフも、行方不明になっていたのを思い出しました。





「ノイズ」

僕は音楽マニアでも、サウンドマニアでもない。

ただ、オルフ作曲の「カルミナ・ブラーナ」をいい状態で聞きたいだけなのだ。

ダイナミックレンジの大きな曲なので、忠実な再生は困難を要する。ダイナミックレンジとは、最大音と最小音のレベル差をいう。クラシック音楽ほど、ダイナミックレンジは大きいといわれているのだ。

この「カルミナ・ブラーナ」を好んで聴いていたのは、同級生の紀子だった。僕は中学の入学式で初めて見た、紀子の姿に一目惚れをしていた。気の弱い僕は交際を断られるのを恐れて、遠くから見ていただけ。人知れず高まっている僕の気持ちを知ることなく、紀子は二年になると僕の前から消えていった。

引っ越してしまったのだ。

引っ越しの前に、紀子の自宅近くを歩いていた時に聞こえてきた

のが「カルミナ・ブラーナ」だった。力強く、やさしいその曲調は、僕を紀子の家の前まで引き寄せた。紀子はステレオの前に置いてあるソファに身体をゆだねて、目を閉じながら聞いていた。僕は、少し開いていた窓から覗きに没頭してしまった。曲に合わせて、ちょっとした指の悪戯と恍惚の表情をする紀子に...

その姿が、網膜に焼き付いた。

当時は曲名がわからなかったもので、必死になって調べまくった。数えきれないほど試聴したCDとレコードの残骸と共に、ようやく曲名を探し当てることができた。

本人に聞くことはできなかった。

紀子の姿を覗き見したことは、罪なことだと思っていたからだ。

紀子は半年後、引っ越し先で交通事故により亡くなった。僕は三日三晩涙を流しながら、曲を聴

き続けた。その時から「カルミナ・ブラーナ」を聞くことによって、僕の脳裏に紀子が蘇ってくるようになった。紀子は淋しそうにしているが、僕に気が付くと、はちきれそうな笑顔で、やさしく抱き締め、解放感へと導いてくれた。

それから「カルミナ・ブラーナ」を聴いているときだけが、紀子と逢えるときになった。

社会人になっても、紀子の想いは絶えることがなかった。CDやレコードで、世に出ている「カルミナ・ブラーナ」のほとんどを聞き終わった頃、サンプリング周波数48KHzのDATによる、スタジオ録音テープが手に入った。大学の友達が録音スタジオに就職して、内緒でデジタルコピーしてくれたのだ。もちろん、個人での楽しみ以外には使わない。DATはサンプリング周波数がCDよりも高いので、よりよい音で再生することができる。

この頃から、ノイズのない状態で曲を聞くと紀子がよりよく鮮明に現れるようになった。反対にノイズがあると現れなくなったのだ。

ノイズが嫌いになっていた。

思い切ってマンションのリスニングルームを防音室に改良することにした。

部屋の回りにクッション材を詰め、その中にスタジオ仕様の部屋を作った。部屋の中でリスニングルームがクッションによって浮いている状態だ。これによって部屋の中の音は外には漏れない。外の音も聞こえないだろう。聞きたいのはスタジオ録音の「カルミナ・ブラーナ」だから、そのスタジオに近い部屋を作れば忠実に再生してくれる。それによって紀子も、より美しく僕の目にうつることだろう。

楽しくなってきた。

僕は没頭し、貯金を注ぎ込んだ。

部屋に新たに購入した再生機器を運び込んだ。DATはスタジオ仕様のスチューダー製で、アンプはマッキントッシュの特別仕様、周波数特性はほとんどフラットというすぐれものだ。スピーカーはアルティックの劇場システムに近い、マンタレイホーンシステムを購入した。周辺機器は使わない方が、音の劣化がないのでいいのだが、パラメトリックイコライザーをDATとアンプの間にセットした。再生不良の周波数をカバーするためにだ。

まずはピンクノイズという低周波から高周波まで含まれている音を流し、アナライザーという周波数測定器にかけてみた。スピーカーの再生音が耳を刺激する。測定器の画面に再生周波数の波形が確認できた。案の定500Hz近辺が2dbほど低くなっている。このあたりはスピーカーの特性だ。2ウェイだとユニットのクロスオーバー周波数あたりが、高くなっていたり、低くなっている。そこをイコライザーで調整して、特性をフラットにするのだ。

柔らかく身体全体を包み込んでくれる、リスニングチェアも特注品にした。これで何時間でも聞いていられるだろう。あのときの紀子みたいに...

いよいよ再生してみる。

スタートしたところで、不快感が襲った。

紀子の面影が脳裏の中でうまく再生できない。紀子は中学生のままではなかった。僕と同様に紀子の面影も成長しているのだ。だから紀子と逢うには大変な集中力が必要だった。

紀子が現れないのは、ノイズのせいだった。

D A Tの走行音が気になったのだ。暖まったアンプの膨張音も耐えがたい。

僕は防音室の中に、ノイズのでる器材を入れる小さな防音室を作ることにした。外に出そうとも思ったが、器材のイルミネーションがこちいい刺激になっているので、見えるところに置いておきたかった。

業者に発注すると、三日で出来上がってきた。

改めて再生してみる。でも、曲が始まってすぐに止めた。

響きが違うのだ。

多すぎる。

部屋の中は吸音素材を使っているのだが、足りないようだ。

僕は決心をした。

この部屋を無響室にしてしまうのだ。音の反射のない壁にする。そうすれば、収録されている音が忠実に再生される。

今度は一週間の工事となった。

かなりの投資だと心に刻みながら、再び再生の時を迎えた。

無音の状態からダイナミックな大音量が響きわたった。メーターのイルミネーションもこちよい。紀子が中学生の姿から成長して、僕に微笑みかけたところで、両耳をふさぎながら消えた。

ノイズが耳にさわったのだ。

何の音だろうか？ 全ての音は遮断したはずではないか？ 再生をストップして耳をこらす。

その音の正体がわかった。

これだけの投資をしておいて、このまま妥協するのは許せなかった。

迷いはしなかった。

紀子と逢うためにはこうするしかないのだ。

僕はナイフを持ち込み、リスニングチェアに座った。そして自分の心臓にゆっくりと差し込んだ。気になる音は、自分の呼吸音であり、血液の流れる心臓の収縮音だったのだ。

血液が勢い良く飛び散った。スピーカーにだけはかからないように注意した。しだいにその量が弱々しくなってきた。

まだ聞こえる。

あと少し・・・

一生に一度しかない瞬間、その瞬間を見逃さないように、最後の力をリモコンの指先にこめようとした。でも指が思うように動かせない。

だめか！ その時、紀子が現れた。子供をあやすような目で見つめながら、僕の指に紀子の指をそえてくれた。僕の指は紀子の指と重なった。

無音の中「カルミナ・ブラーナ」が聞こえ始めた。

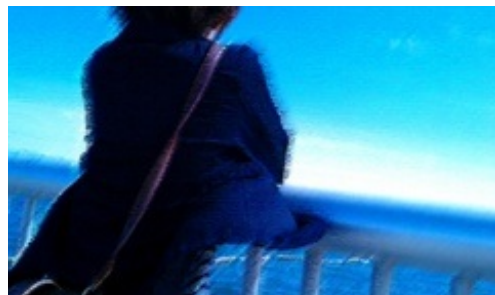
と、その時気がついた。一切のノイズを削除したにもかかわらず、曲の中にノイズが入っていたのだ。でも、何もできなくなった今では、割り切るしかないだろう。曲内のノイズは演奏の一部なのだ...

前向きな考え方をしたとたん、記憶と想像の紀子の姿が終わりのない映像となって、めまぐるしく僕のかすかな意識を刺激した。

心地よかった。

曲は何度もリピートするだろう。

他の誰にも聞こえない大音量で...





「エンドレス イブ」

街にはハデなディスプレイと、ガンガンに流れるBGMが、クリスマスムードを盛り上げている。

今年のクリスマスイブも、沙也加からの招待状に誘われて、彼女の部屋の呼び鈴を押すことになった。

「いらっしゃい。沖田さん！」

笑顔の沙也加が、部屋の中にエスコートしてくれる。

やさしいしぐさが、男心をくすぐる。

クリスマスらしい赤のニットスーツが、身体の線を浮きあがらせている。大きな瞳と、ツヤツヤした唇、そして白い肌がいつも僕をそそる。沙也加は年をとらない永遠の女性なのだ。

「これ、プレゼント。僕が一番だった？」

クリスマス包装を椅子に置く。テーブルには十人分の料理が並んでいた。

沙也加はワインを開けながら、上目づかいに僕を見て言った。

「あら？ 知らなかったの？ 今年は沖田さんと、青木さんだけなのよ。残念だわ。急に淋しくな
って...」

ドキッとした。

「他の人は？ 何かあった？」

「まあ、どうぞ一杯！」

沙也加はワイングラスにワインを注ぎ、空中で乾杯をした。

「メリークリスマス！」

ワイングラスを傾ける。まるで血のような赤ワインが、胃にしみわたる。沙也加は、僕の持ってきたクリスマスプレゼントを開けながら、話を続けた。

「佐藤さんは心不全で八月に亡くなったのよ。清水さんは癌で十月に、水上さんは交通事故で十一月に...みんなまだ若いのに、急にどうしたのかしらね？」

「知らなかったよ...僕は、会社倒産の後始末のために海外に出張していて、先週帰ったばかりだからね...みんな、残念なことをした...」

「このクリスマスイブのために帰ってきてくれたのでしょうか？　うれしいわ。わあーすごい！　とってもよく切れそうなノコギリだわ。ありがとう！」

沙也加は大切そうに浴室の入り口に置いた。

玄関チャイムが鳴る。

「いらっしやい！　青木さん！」

「やあ、メリークリスマス！」

部屋に上がった青木は、僕の顔を見ると安心した表情を見せた。

「沖田だけでも来てくれて助かったよ。今年は三人も死んでしまったんだ。沖田には連絡がつかないし...今年は何りかと思って震え上がっていたよ。会社が倒産したんだってな？　後始末は終わったのか？」

「とりあえず、迷惑を最小限度に押さえたよ」

「青木さんのプレゼントはこれ？」

沙也加は包みを開け始めた。

中には、牛刀が入っていた。

「ありがとう。きれいな牛刀ね。よく切れそうだわ。さあ、パーティーを始めましょう」
僕たちは改めて乾杯をした。僕と青木はいつものように手が震えていた。

ワインをガブ飲みして忘れようと思ったが、酔うこともできない。

青木と共謀して沙也加のグラスにどんと注いだ。沙也加はだんだんと、ろれつが回らなくなっていく。

これではいつもと同じだ。

酔った声で、沙也加が言った。

「もうこんな時間。そろそろかしら？」

ソファに座っている沙也加の組んだ足から、黒いパンストにおおわれた、白いパンティーが見え隠れする。

僕と青木は目で合図をすると、沙也加を押さえ付けた。

「何するのよ！　嫌！」

全身で抵抗する沙也加の顔を殴った。

「騒ぐと殴るぞ！」

青木の言葉に、沙也加の大きな瞳から涙があふれた。

六年前は、五人で沙也加を強姦した。

大学を卒業する最後のクリスマスイブに、沙也加の部屋を提供してもらい、ホームパーティーを企画した。男女十人が集まると沙也加には嘘をつき、沙也加を強姦するパーティーを企画したのだ。当日、沙也加は適当にごまかし、酒を飲ませ続けた。適度に酔い潰れたところで、押さえ付けみんなで犯した。

沙也加は男に甘える女なのだが、特定の男をつくらないタイプだった。イブの晩に集まった五人の男たちは、みんな沙也加に、振られた男たちだったのだ。

卒業の開放感も手伝っていた。

ところが、事態はとんでもない方向に進んでいった。沙也加を犯した後、そのままベットに寝かし、僕たちはビールを飲んでた。

ときどき沙也加を横目で見ては、自業自得だと納得しようとしていた。卒業後の話に熱中していたとき、殺気を感じた。

沙也加が包丁を持って立っていたのだ。僕たちの目が包丁に集中した。

「わたしは、あなたたちなんか嫌いなのよ。他の人の力を借りなくちゃ何もできない男なんて、我慢できない。これがわたしの気持ちよ！」

沙也加は僕を見つめながら、手首に包丁を入れた。血液は勢い良く、ドクンドクンと心臓の伸縮に合わせて天井に吹き出した。

「やっちゃった！」

沙也加は崩れるように倒れこんだ。

破けたニットスーツの鮮やかな赤と、血の色が対照的だった。血は空気に触れると鮮やかさを失っていく。

呆然としてはいられない。僕たちには未来がある。就職も決まっているし大学卒業ももうすぐだ。沙也加のために、全てを棒に振りたくはなかった。

死体を処理することにした。

できるだけ細かくして、ゴミといっしょに出すことにした。肉を削ぎ落とし、筋をはがして、骨をノコギリで細かく切った。頭蓋骨はカナズチで砕いた。脳味噌が飛びはねる。五人で一晩かかって解体...部屋の掃除をして、それぞれ十一キロの肉を持って部屋を後にした。

その後、沙也加の親が捜索願を出したらしいが、事件は発覚しなかった。沙也加の住んでいたマンションは、老朽化のため半年後に取り壊された。その時点で、あの事件は闇に葬られたと思っていた。

ところがその年のクリスマスイブの、ホームパーティーの招待状が、僕たち五人に舞い込んだ。もちろん、沙也加からのものだった。住所は取り壊されたマンション...五人で行ってみると、あのときのマンションが闇の中から出現した。イブの夜だけ異次元から現れるのだ。沙也加と共に

...

そしてパーティーが始まる。十時にみんなで、嫌がる沙也加を強姦。そして沙也加の自殺。いまだに僕を見て手首を切る。死体処理...十一キロの肉を持ってこの世に戻るのだ。あれから五年間、同じ事を繰り返してきた。いままでは五人いたから、どうにか続けてこれたが、今年は二人だ

。

朝になっても、死体の処理は終わらなかった。高価な牛刀もノコギリも、切れなくなっていた。血と肉の匂いが汗と共に、身体にからみつく。それでも二十五日の夕方にはどうにか処理し終わった。

でも、ひとり二十七・五キロの肉を処理しなくてはならない。大きな鞆に詰め込み、掃除をしてフラフラになりながら二人でマンションを出た時には、二十六日の早朝になっていた。

青木がつぶやく。

「いつまで続くのかな？」

「沙也加が許すまでだろう...」

「身体大切にしろよな。俺ひとりになったらできないだろうから」

「お互いにな」

二人とも疲れ果てていた。

「じゃあ、来年...」

青木と別れて歩きだすと、車の急ブレーキの音が背中で聞こえた。

青木が車に跳ねられたのだ。急いで駆け付けたが、青木の首は百二十度以上曲がり、息耐えていた。

朝日が眩しい。どうやって、どこまで歩いてきたかも覚えていない。

とうとう、ひとりになってしまった。

来年も沙也加からの招待状はくるだろう。

避けられないことだ。ならば、とことん沙也加に付き合うしかない。一度は惚れた女だ。

一年のうちに、慣れるしかない。

近くの公園で遊んでいる少女が見えた。

まずは、小さな子からだな...

僕は公園に向かって歩いていった。

